

「ロシア語とロシア文化の魅力」 ～おすすめのロシア文学3作品～

高部知史

ロシア語の魅力（あるいは障害？）といえば、キリル文字ではないでしょうか。突然ですが、次のロシア語は何と発音するか分かりますか。(1)「Я」、(2)「МГУ」、(3)「СССР」。正解はこのコラムの最後をご覧ください。

今春、京都外国語大学に外国語学部ロシア語学科が開設され、過去にロシア語を学んだ私としてはとても嬉しく、心よりお祝い申し上げます。付属図書館では「ロシア語図書誌データベース」を構築され、4,000冊を超えるロシア語の所蔵資料を分類毎に検索することができ、学修・研究に快適な環境も用意されています。日本との価値観の違いなどから「遠い隣国」とも呼ばれるロシアですが、ロシア語学科の開設を機に、政治的・文化的な距離が一層近付くことを期待しております。

ロシアは帝政時代、ソ連時代から現代に至るまで、それぞれの時代の過渡期（革命時代、ペレストロイカ期）も含めて、多様な文化を生み出してきた芸術大国で、欧米・アジアとは違った宗教観、価値観もまた魅力的です。ここでは、トルストイ、ドストエフスキーといった文豪たちが名を連ねるロシア文学から、私がおすすめる3冊を紹介します。ただ面白いだけでなく、ロシアの政治や文化、アイデンティティを感じていただけるものを選びました。

1冊目は、チェーホフ（А. Чехов）『桜の園』（浦雅春訳ほか）です。それまで時代や歴史的な出来事を対象とした長編の物語（＝大きな物語）が主流とされていた文壇において、チェーホフは市井に生きる人々の日常（＝小さな物語）を短編小説や戯曲でユーモラスに描くことにより脚光を浴びました。チェーホフの文学には民衆の喜怒哀楽や、人生の機微が文章から滲み出ている、とても味わい深いです。

2冊目はソルジェニーツィン（А. Солженицын）の『イワン・デニーソヴィチの一日』（木村浩訳ほか）です。作者が体験したソ連のラーゲリ（強制収容所）における1日を扱ったものです。そこで生活する人々の生きがいや知恵、希望と絶望など、極限状態に置かれた人々の思考・行

動がリアルに描かれています。短い作品ですが、とても読み応えがあります。

最後は、ブルガーコフ（М. Булгаков）の『巨匠とマルガリータ』（水野忠夫訳ほか）で、これは私が大好きな小説です。作品を理由に精神病棟に隔離された小説家を、彼を愛するマルガリータが悪魔の力を借りつつ救出し、最後は2人に天界での永遠の幸せが与えられるというのが物語の本筋です。しかしこの物語の魅力は、悪魔たちが暴れ回るときの奇天烈さや、作中作として描かれる約2000年前のキリストの処刑をテーマにした小説家の作品が、不思議と本作が書かれた世界観（1930年代のモスクワ）と共鳴しているところにあります。この小説は、ソ連当局から発行を認められず、出版されたのはブルガーコフの死後20年以上も経ってからのことでしたが、そうした運命を辿った理由について考えてみることも、今日の私たちにとって有意義なことではないでしょうか。

ロシアの芸術はほかにも、チャイコフスキー、ラフマニノフによるロマンチックな音楽、スタニスラフスキー、メイルホリドらによる伝統と革新の演劇メソッド、エイゼンシュタインからソクーロフに至る常に新しい映画など、枚挙にいとまがありません。マトリョーシカやイクラ（ロシア語で魚卵全般を意味する「イークラ（икра）」が語源）など、日本でも馴染みのものや言葉も沢山あります。

確かに、動詞の活用や格変化など、外国語を学ぶ際の試練は当然ありますが、言語を通じてこれらの文化に直接触れられる魅力は、その苦勞を補って余りあるはずです。ロシア語学科から多彩な人材が世界へ羽ばたかれることを楽しみにしております。

- 冒頭の答え (1)「ヤー」（「私」、ロシア語の一人称単数）、答え (2)「エム・ゲー・ウー」（「モスクワ国立大学」の略称）、答え (3)「エス・エス・エス・エル」（「ソビエト社会主義共和国連邦」の略称）

たかべ さとし（株式会社紀伊國屋書店）